

9) 沖曳網漁獲アユの生残率

酒井明久・澤田宣雄

【目的】活魚として利用される沖曳網漁獲アユは、サイズが小さいことや、底曳き漁法の特徴から池入れ初期の生残率が低下するおそれがある。そこで、本年度の沖曳網漁獲アユについて池入れ初期の生残率を調べ、過去の調査事例と比較した。

【方法】2000年2月7日に愛知川沖、水深約20mの地点において沖曳網で漁獲されたアユを実験に用いた。供試魚は漁獲後直ちに輸送し、水産試験場の屋内池（7m²）に収容した。輸送中及び池入れ時の飼育水は、0.7%の食塩水に調整した。収容翌日から18℃の地下水を注水し始め、2日間で真水に戻した。その後は18℃の地下水で飼育した。収容後2日目から1～3%の給餌率で配合飼料を与えた。

【結果】漁獲アユの体重組成を図1に示した。平均体重は0.29gで、0.3g未満のアユが全体の70%以上を占めていた。

池入れ7日後までの飼育成績を図2に示した。アユの生残率は緩やかに低下し、3日後には85.7%、7日後には80.4%となった。この間、冷水病と考えられる症状のアユはみられなかった。

これらの結果を1995年以降に沖曳網漁獲アユについて行った同様の試験と比較した（図3）。本年度は、漁獲時の平均体重では過去の7件のほぼ平均的なサイズであったが、3日間生残率では最も高い値であった。したがって、本年度の沖曳網漁獲アユは種苗として特に問題はないと考えられた。

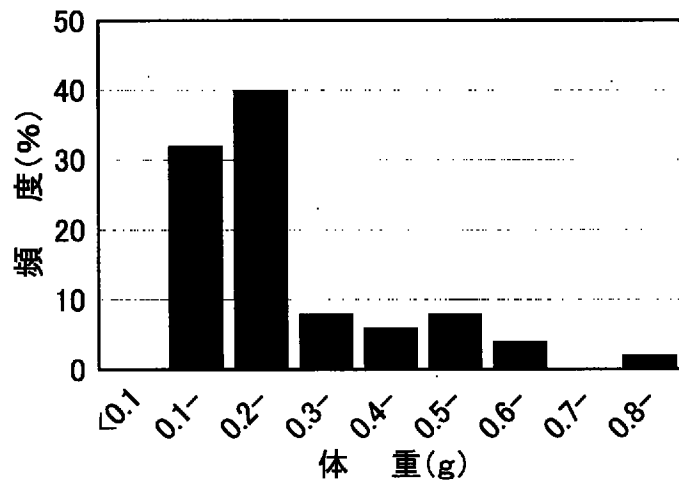


図1 沖曳網漁獲アユの体重組成。
 漁獲日:2000年2月7日. n=50.
 平均±標準偏差:0.29±0.157g.

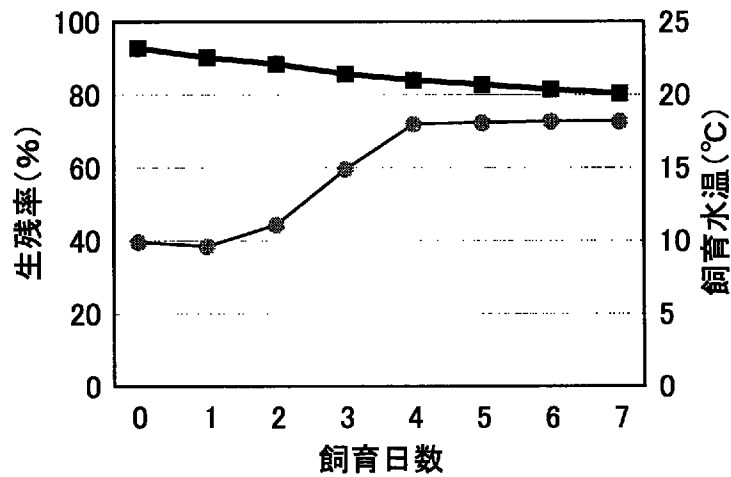


図2 沖曳網漁獲アユの飼育経過。
 ■:生存率, ●:飼育水温.

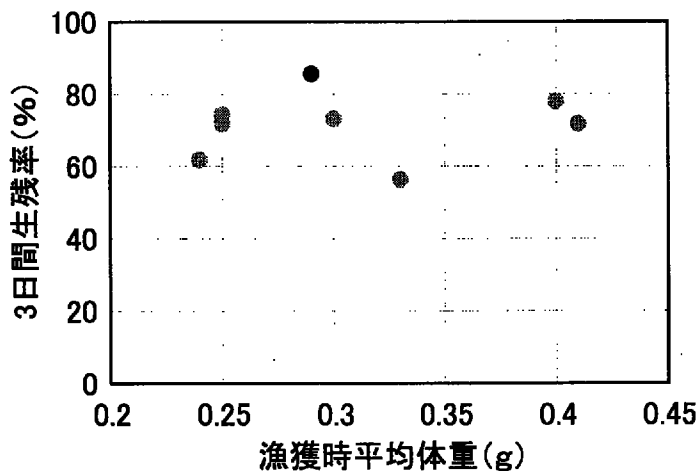


図3 沖曳網漁獲アユの漁獲時平均体重と3日間生存率の関係。
 1995年以降に行った同様の試験結果と比較した。
 ●:本年度の結果, ●:過去の結果.